2014 年 7 月 16 日放送

印象に残る症例②

葛外科・脳神経外科クリニック　副院長　　佐々木　千恵子

泌尿器科診療を行っておりますと、下腹部の原因不明な痛み、重苦しさを訴えて受診される方々にしばしば出会います。下腹部がズーンと重苦しい、時には刺すような痛みを感じる、など個人差はあるものの、みなに共通することは、痛みの原因となる器質的な疾患や炎症が検査をしても見つからない、ということです。そのため、不定愁訴としてかたづけられてしまう傾向にあり、積極的な治療が行われず、悩まれている方が多いのも事実です。このような西洋医学では治療しがたい不調、に対する治療を得意とするのが漢方薬。

今回、下腹部痛に効果があった 2 症例を紹介したいと思います。

一人目の患者さんは、84 歳、女性の方です。旦那さんと二人暮らしで、身の回りのことは自分でこなされており、自立されている患者さんです。

主訴は、お腹の周りが引っ張られるような感じがする、とのことでした。症状は、1 か月くらい前からとのこと。きっかけは、旦那さんがお風呂場で転倒し、女手一つで何とか旦那さんを一人で起こした後から、この症状が出現しているとのことでした。もともとこの方は腰痛持ちなのですが、腰が痛いのも忘れるくらい一生懸命だった、とのことでしたので、かなり力を振り絞って旦那さんを起こしたのでしょう。

さらにお話を聞いていくと、実はトイレに行ってしゃがんだり、いきむと何かが下がってくる感じがするとのことでした。これも旦那さんの転倒事件以降、気になるようになっ

てきたとのことでした。載石位で努責してもらうと、軽度膣前壁の膨隆がみられ、膀胱瘤が疑われました。膀胱の下垂に伴う下腹部のツッパリと考え、補中益気湯　7.5ｇ分３で処方。2 週間後受診時には、お腹周りの症状は落ち着いており、下がってくることもなくなり調子が良いとのことでした。その後も投薬を継続することとなりました。

2 例目は 75 歳、やせ形の女性です。下腹部痛を主訴に X 年 2 月に当院受診されました。

X-3 年、大腸癌に対して内視鏡下でポリペクトミーを施行。術後から下腹部痛が出現してきたとのことでした。朝は調子が良いが夕方位から下腹部がミリミリしてくる。就寝前も痛みが気になるとのことでした。また、尿がたまってきてもミリミリと痛みを感じ、頻尿、排尿困難感、尿勢低下がみられるとの訴えがありました。

尿流量測定をしたところ、蓄尿量、尿勢、残尿ともに異常はみられず。検尿、腹部エコーともに異常は見られませんでした。載石位にて努責の際、膣前壁の軽度膨隆がみられました。膣の萎縮を強く認めた以外、婦人科的な子宮下垂などの異常所見は見られませんでした。

今回の患者さんは明らかな下垂感の訴えはありませんでしたが、膣前壁の膨隆、膣萎縮が見られたことから補中益気湯 7.5ｇ分 3 を処方することといたしました。2 週間後受診。漢方薬を内服したら、まだ、たまには症状が気になるが、すごく楽になったと喜ばれ、内服継続となりました。

症状はたまに気になるくらいまで改善し落ち着いていましたが、X 年 10 月、寒くなってから下腹部のミリミリする鈍痛が気になるようになってきた、と訴えられるようになりました。このころの症状は、朝起床時より症状が気になるとのことでした。また、下腹部を持ち上げるようにベルトをすると楽になるとのことでした。

内服状況を確認すると、一時調子が良くなってきていたため、補中益気湯の内服を忘れることが多くなっていたとのことでしたので、定期的な内服を指導し、さらに桂枝茯苓丸 2.5ｇ分 1 を追加して経過をみることにいたしました。2 週間後受診時には下腹部のミリミリする痛みは落ち着き、調子が良くなっておりました。しかし、その後も症状には波があり、症状が強いときは若い時の生理痛の感じが続いているようだ、と例えられるようになりました。

X＋1 年 2 月より、桂枝茯苓丸 5.0ｇ分 2 のみで経過を見ることにいたしました。調子が悪いときには桂枝茯苓丸を 1 日 3 回まで増量して服用してもらうこととし、経過をみておりました。現在は、桂枝茯苓丸 2.5ｇ分 1 で下腹部痛の症状がコントロールできるようになりました。

今回は、補中益気湯単独、もしくは桂枝茯苓丸を追加し下腹部痛が改善した症例を紹介させていただきました。

補中益気湯の構成生薬は、黄耆、人参、甘草、朮、当帰、陳皮、升麻、柴胡、生姜、大

棗の 10 味から成り立っています。黄耆、柴胡、升麻などは筋肉のトーヌスを正常化させる升提作用があり、筋肉のアトニー状態を改善します。

1 例目は、一時的な筋肉の疲労に伴う気虚、2 例目は手術によるストレス後に発生した気虚を目標として補中益気湯を使用しました。

2 例目では、補中益気湯でも多少の改善は見られましたが、症状が長期にわたっていることや生理痛のような痛み、という患者さんの訴えより、瘀血を疑い桂枝茯苓丸を追加しました。桂枝茯苓丸は、いわゆる駆瘀血剤の代表的な処方です。

桂枝茯苓丸の構成生薬は、桂枝、芍薬、桃仁、茯苓、牡丹皮の 5 味から成り立っています。桃仁、牡丹皮に駆瘀血作用があり、牡丹皮にはさらに消炎止血作用があります。桂枝は血行を良くして駆瘀血作用を助け、茯苓には利尿作用が、芍薬は鎮痙鎮痛作用があり、腹痛や筋肉痛を治します。

一般的にはこの漢方薬は、更年期障害、月経不順、月経困難などの婦人科疾患によく使われますが、長引く症状に対しても、桂枝茯苓丸で改善することがあります。その理由は、何らかの症状が長引く方には瘀血が隠れていることがあるからです。今回のように脾・気虚で補中益気湯を内服している方でも、桂枝茯苓丸のような駆瘀血剤の追加でさらに症状が落ち着く方がいらっしゃるようです。

下腹部が重苦しくて痛むが、鎮痛薬を内服してもあまり効果がない、明らかな原因がわからない下腹部痛で悩まれる女性の方は、身近に意外と多くいらっしゃられます。このように西洋医学では治療法がない症状に対して、漢方薬が奏効する症例が多くみられます。これからも、気のせい、と目に見える異常だけにとらわれることなく、患者さんに寄り添った治療を目指していきたいものです。